

講義収録システムを活用したアクティブラーニングの試行

Trial of Active Learning that Utilized a Lecture Recording System

安達 一寿¹⁾

Kazuhiisa ADACHI

大山 博幸²⁾

Hiroyuki OHYAMA

要 旨

大学教育現場ではアクティブラーニングの取組が加速されているが、本研究では講義収録システムを活用した傾聴トレーニングとマイクロティーチングでの活用について報告する。傾聴トレーニングの授業実践では、省察的学習に基づく授業設計と実施をおこない、実施直後にその場で省察的学習の機会を学生にもたすことが実現でき、傾聴の技術を実践的に経験できたと考える。マイクロティーチングの授業実践では、クリッカーと併用することで、授業実施中に簡単に気がついた点を指摘でき、効率的に授業のふり返りや改善点の検討がおこなえた。2つの実践を通して、「学習の質」を高める方法として、講義収録システムが有効活用できることが明らかになった。

1. はじめに

本研究はアクティブラーニングを実施するための教育方法として、講義収録システムを活用した傾聴トレーニングとマイクロティーチングでの授業実践をおこなったので、その状況について報告する。

2012年に取りまとめられた、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」⁽¹⁾では、「学士課程教育の質的転換」として、「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与え

ながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。」との方向性を示している。この答申以来、大学関連の補助事業における施策誘導もあり、河合塾の調査結果⁽²⁾によると、各大学ではアクティブラーニングの取組を加速している状況にある。

アクティブラーニングを実現する教育方法としては、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれる。溝上（2007）⁽³⁾は、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループワーク等の形態について、「学習プロセス」と「学習の質」の観点からの考察をおこなっている。そ

¹⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部メディアコミュニケーション学科

Department of Media Communication Studies, Faculty of Human Life, Jumonji University

²⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部人間福祉学科

Department of Human Welfare, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード: アクティブラーニング、講義収録システム、クリッカー、省察的学習、マイクロティーチング

の中で「学習の質」を高める工夫として、「他者の視点をより豊かに導入して自身の思考を相対化させる『他者の視点強化』」があるとしている。大山ら(2013)⁽⁴⁾は、グループ学習における類型化を図り、授業デザインへの示唆を提案している。また、ビデオチャットや動画配信などを利用して、学生の自主的な行動を活性化して、課題の共有や授業への積極的な参加を促すことで、協調学習や参加型授業などの能動的学習を可能とすることも指摘している。林(2010)⁽⁵⁾は、授業実践の類型化を通して、同じ学習空間であっても、ICT機器の利用方法は授業の目的に応じて多様であり、様々な可能性があることを示している。

本研究ではこれまでの先行研究を基に、講義収録システムを活用した授業で、目的と形態の異なる2つの実践について報告する。1つは、小グループ傾聴トレーニングでの省察的学習に用いた実践である。もう1つは、教職課程マイクロティーチングでの実践である。

2. 講義収録システムの概要

本研究では講義収録システムとして株式会社フォトロンが開発したPF-NOTEを使用した。⁽⁶⁾PF-NOTEは「クリッカーと映像収録との統合により授業や実習等でのコミュニケーションを促進することができる、授業での双方向のコミュニケーションを可能とした学習コミュニケーションツール」で、「パソコン画面・板書・教材提示装置などの画像情報と、ビデオ映像・音声情報をリアルタイムにビデオファイル化」できるシステムである。また「ワイヤレス式のリモコン(クリッカー)を利用して学生の反応を瞬時に記録」することができる。図1にシステム本体、図2にクリッカーの写真を示す。

筆者らは、このPF-NOTEによって、授業での演習等による学生の活動場面を記録することができ、直後あるいは事後にこのシステムにより同期収録されたデータと共に、その場面映像を振り

返ることを意図した学習が実現できる点に注目する。すなわち省察的学習(reflective learning)を行うためのツールとしてこのシステムは優れていると考える。



図1 PF-NOTE 本体



図2 クリッカー：左は教師用、右は学生用

3. 「傾聴トレーニング」での試行

(1) 実践の概要

社会福祉士養成課程指定科目である相談援助演習の教育内容の1つに、相談援助のために「基本的なコミュニケーション」の習得が学生に求められる⁽⁷⁾。「基本的なコミュニケーション」とは、マイクロカウンセリング等で示されている傾聴の技術である。クライアントとの相談面接は実際的には多様な状況みせるが、クライアントの主訴やニーズの理解、あるいはクライアントへの共感的理解をしていくには、「相手(クライアント)の話を十分に聴くこと」がソーシャルワーカーに求められる。

ところで、傾聴の技術は実践知あるいは臨床の知とはいえ、その習得には、その概念理解のみにとどまらず、実際の・体験的な学習、あるいは訓練が必要であると考え。そのため、傾聴を教える教師は演習系の科目においてそのような学習環境を設定提供していくことが必要である。これまで、相談援助演習（旧社会福祉援助技術演習）における傾聴に関する報告は、佐藤（2014）⁽⁸⁾、立石・守本（2007）⁽⁹⁾、磯部（2002）⁽¹⁰⁾があるが、これらは傾聴の意義とその技術を学習者である学生に講義し、模擬面接等ロールプレイでの演習を行った後、実際に高齢者等を対象とした傾聴体験の実施やキャンプ等の野外活動場面での学生相互のコミュニケーション体験の実施といった、学外活動のなかで傾聴を実践する機会を提供しその結果を評価するといったものである。これらは、学生に具体的な傾聴実践を求めるところに意義はあるが、傾聴技術の習得そのものについての方法や手続きについては十分に明示されていない。

また傾聴あるいはカウンセリングの基本技術習得のためのトレーニングに関する報告は諸富（2010）⁽¹¹⁾、三島・久保田（2003）⁽¹²⁾をはじめとしてこれまで多くあるが、これらはロールプレイング等傾聴場面の実施とその振り返り、及び相互評価や観察者からの評価による活動である。

そこで筆者（大山）は、傾聴技術の習得を目的に、講義収録システムであるPF-NOTEを使用した、省察的学習に基づく授業：「傾聴トレーニング」の設計と実施を試みた。本講義収録システムを使用することで、①教師や観察者の観察評価結果を当該対象場面ごとに同時収録できること、②聴き手役と話し手役は、それら収録された結果を手掛かりに、振り返りの対象とする場面や振り返りのきっかけを得ることができること、③観察者としての学生も自身らの観察評価結果が収録された映像とともに確認されることから、観察時及び振り返り時においてより主体的に授業に参加できること、を特徴とする。

(2) 対象と実施の手順

対象は福祉系学科に所属する3年生で筆者（大山）の人間福祉演習（ゼミ）を履修している7名の女子大学生であった。学生はあらかじめ、本傾聴トレーニングを行う前に、事前の授業でカウンセリングの基本技法としての傾聴態度や技法の講義や演習を受講していた。本傾聴トレーニングは平成25年10月から11月にかけて、週1回90分のゼミの授業内に実施した。1回の授業で1、2名の学生が傾聴場面の聴き手となって実施した。授業は合計6回行った。

①学生にあらかじめ聴き手と話し手の役割を決め傾聴を行った。聴き手は、事前の講義で学んだ傾聴の態度と技術を駆使して、話し手の話を傾聴するよう努めるように定めた。また話し手には、「最近気になっていること」、「関心を持っていること」など、話し手自身についての内容を話してもらうように定めた。

②聴き手と話し手はお互い椅子に掛けてテーブルを挟まずやや向かい合い、傾聴を行った。傾聴の時間は10分程度とした。

③他の学生は傾聴場面を観察した。この傾聴場面をPF-NOTEによって記録した。また、観察する学生たちにはクリッカーによる評価を求めた。評価の方法は、聴き手の傾聴スキルや態度に注目して、「よかったと思える場面」と「気になった場面や疑問に思った場面」にそれぞれボタンを押すように伝えた。観察学生のクリッカーによる評価の「よかったと思える場面」は青色の棒グラフとして、「気になった場面や疑問に思った場面」は黄色の棒グラフとして、それぞれの度数が、録画場面に同期収録された。

④また教師（大山）も教師専用のクリッカーで、同様の方法で評価した。この教師の評価結果は学生の棒グラフ表示とは別に青色や黄色のドットで固有に表示されていく。なおこのクリッカーにはもう一つ「悪い場面」として評価するボタンがあるが、傾聴のスキルは非常に高度であり、それを

身に着けることは学生にとってはなかなか困難であるため、学習の動機づけを低下させないためにも、今回はあえて使用しないこととした。

⑤図3に示すように、授業場面を録画するビデオカメラは1台のみ設置し、聴き手役話し手役の両方の全身が映るようにした。傾聴終了直後、図4に示すようにPF-NOTEによって記録された映像結果をモニターで教師、学生ともに視聴し、振り返りを行った。

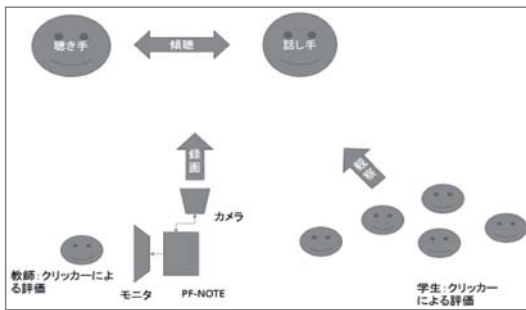


図3 傾聴場面の録画と観察評価

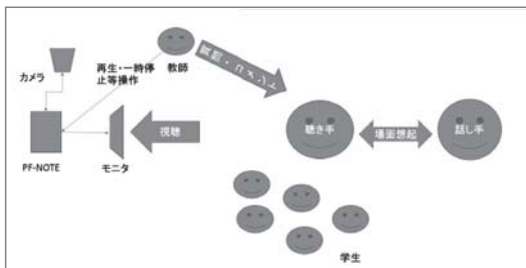


図4 PF-NOTEによる再生映像を使用した振り返り

振り返りの焦点は、聴き手役である学生の傾聴体験である。振り返りの際教師は、再生している映像を一時停止して、聴き手役だった学生に「ここでは何が起きていましたか?」「ここで、なぜ〇〇〇〇と言ったのですか?」などと、聴き手が傾聴時、その時その場面で、自分に何が起きていたのか、あるいは何をしようとしていたのかといった、聴き手としての判断・解釈・意思決定について意識化するような質問や促しを行った。聴

き手は、映像視聴と上記のような教師の問いかけを手掛かりに、先ほど行った傾聴場面を想起することを基本に振り返りを行うことになる。聴き手はその時その場面での事実に戻りながら、「そのときは、とにかく〇〇〇と思っていた」、「このときは話し手が〇〇〇といったことに対してどう返したらよいかわからず焦っていた」など、自身の内的過程やとった行動を吟味していく。

⑥また教師は、傾聴時の話し手の体験にも焦点を当てた。話し手も同じく映像視聴を手掛かりに、自分の話を十分に聞いてもらった感じがあったかどうかを基準に、その時その場面での事実に戻りながら、話し手としての内的過程やとった行動を吟味するように促した。また、「聴き手の〇〇〇な態度によって話しやすくなった」、「〇〇〇と言われたので、〇〇〇と感じた」など、聴き手の傾聴態度や技術を通じた働きかけについてのコメントを聴き手にフィードバックするように促した。

⑦最後に観察者としての学生に対して観察しているの感想や質問を促した。振り返りの時間は30~40分程度だった。このように、約6回の授業の中で、受講学生7名全員がそれぞれ聴き手役、話し手役を1回ずつ体験した。

(3) 傾聴トレーニング実施の評価と考察

今回は傾聴トレーニングを体験した7名の学生のうち、任意の学生2名に対して、傾聴トレーニングを受けてみて、どのような点がよかったか、もしくはよくなかったかといった感想を問うインタビューを行った。

学生からよかったと思われる点では、「終わった後映像を観れること。自分の癖などその場で確認できること。」が挙げられた。よくなかった点としては、「(観察評価する際、)クリッカーの押すタイミングがわからなかった。」「何がよくて何が悪いのかわからなかった。よい点は見つけようとするけれども、疑問点は難しかった。何が疑問なのかがわからなかった。」や「観察する人と

傾聴する人との距離が近く緊張感があった。特に傾聴を行っているとき、見られていることや評価されることでとても緊張した。」といったことが挙げられた。

また、これらよくなかった点においては「観察評価は評価の基準が示されていたらやりやすかったかもしれない」。観察評価される際の緊張に関して「間に机を挟むか、あるいは観察評価を別室で行うなどするとよかったかもしれない。」といった改善的な意見も挙げられた。

4. 「マイクロティーチング」での試行

(1) 実践の概要

教職課程科目である「情報科教育法Ⅱ」の教育内容として、授業実施技術の向上を図るためにマイクロティーチングを実施している。マイクロティーチング実施上の工夫としては、三尾他⁽¹³⁾、金子⁽¹⁴⁾、宮田⁽¹⁵⁾らの実践や報告があるが、方法としては、授業実施内容の録画（DVD-VIDEOなど）や観点シート等を用いた相互評価などでのふり返し活動である。

本実践で用いた講義収録システムは、画像記録として、①マイクロティーチング中の教師の様子、②生徒の様子、③教師用PC画面（パワーポイントやデモなど）を同時に記録することが可能である。また、生徒役の学生にクリッカーを配布、クリックすることで、マイクロティーチング中に、①よい、②わるい、③その他、の3通りの反応を、タイムライン上にリアルタイムに記録することが可能である。それにより、映像記録と反応評価が一体化されるため、マイクロティーチング実施後のふり返し活動の効率化と質の向上を図ることが可能である。

(2) 対象と実施の手順

対象学生数が少数（3名）であったため、各学生に2回ずつマイクロティーチングを実施した。機器の設置準備などは、すべて学生が行ったが、一通りの手順が分かれば、難なく配線・設置など

の準備を行うことができた。

マイクロティーチング実施中生徒役の学生は、授業を受講しながら、気のついたところで、クリッカーのボタンを入力し、その内容についてメモすることとした。図5、図6に記録された画面例を示す。



図5 PF-NOTE 画面例



図6 画面表示領域内容

図5では、教師と生徒の動きを同一カメラで撮影したため、1領域は使用していない。タイムライン、詳細画面には、①よい、②わるい、③その他、の反応記録が表示される。レスポンスグラフには、リアルタイムにその時点で反応記録が表示される。

(3) マイクロティーチング実施の評価と考察

初回の実施では、マイクロティーチング自体への慣れもあり、なかなかクリッカーのボタンを押

すタイミングが掴めなかったようであるが、マイクロティーチングの評価観点の不理解と考えられる。2回目以降は、その問題は解消された。通常のマイクロティーチングでの反応記録と違い、教師役、生徒役学生とも、お互いの反応記録をリアルタイムに参照することができ、効率的に授業改善に結びつけることができた。また、マイクロティーチング実施後のふり返りでも時間の効率化が図れ、限られた授業時間内での利用に効果的であることが分かった。学生の利用に関する評価も良好であり、授業への参加意欲も高めることができたと考えられる。

5. まとめ

実践を通して、学生のインタビューにもみられたように、授業収録システムの機能により、実施直後にその場で省察的学習の機会を学生にもたすことが実現でき、実践的に教えることができることが示唆されたと考える。そして、2つの実践を通して、「学習の質」を高める方法として、講義収録システムが有効活用できることが明らかになった。

傾聴トレーニングの観察評価においては、授業中次第に学生がクリックしなくなったこと、特に「気になった場面や疑問に思った場面」の評価はほとんどクリックされなかったことに気づいていた。観察評価で、上記学生の意見も含め、今後改善していくことが必要と考える。

マイクロティーチングの観察評価では、マイクロティーチング自体の趣旨や方法の理解を得た上で実施する必要がある、その経験に応じてより効果的な利用が可能になることがわかった。また、お互いの比較を通して、学生自らが授業技術向上のためのふり返りを効果的におこなえることがわかった。

今回は授業実践の評価としては任意の学生へのインタビューのみにとどまったが、今後は、学生の学習効果も含めたより実証的な実践評価を行っ

ていくことが課題である。

参考文献

- (1) 文部科学省 (2012) 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて, 中央審議会答申, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- (2) 河合塾 (2013) 「深い学び」につながるアクティブラーニング, 東信堂
- (3) 溝上慎一 (2007) アクティブ・ラーニング導入の実践的課題, 名古屋高等教育研究, 7: 269-287
- (4) 大山牧子, 田口真奈 (2013) 大学におけるグループ学習の類型化: アクティブ・ラーニング型授業のコースデザインへの示唆, 日本教育工学会論文誌37 (2): 129-143
- (5) 林一雅 (2010) ICT 支援型ラーニングスペースにおける授業の類型化, 日本教育工学会論文誌34 (Suppl.): 113-116
- (6) フォトロン社 (2014) PF-NOTE 機能説明, <http://www.photron.co.jp/pf-note/> (2014/9/30アクセス)
- (7) 社団法人日本社会福祉士養成校協会 演習教育委員会 (2013) 相談援助演習のための教育ガイドライン (案)
- (8) 佐藤順子 (2014) 傾聴することを学び、傾聴することから学ぶ—京都市上京老人福祉センター「お話を聴く会」の取組みから—, 佛教大学福祉教育開発センター紀要11: 121-128
- (9) 立石宏招・守本友美 (2007) 4つの役割に焦点化したソーシャルワーク教育—技術力向上を目指した教育実践方法の検討—, 社会福祉学47 (4): 149-158
- (10) 磯部美也子 (2002) 高齢者(祖父母)のライフストーリーを傾聴する体験が学生にもたらすもの—カウンセリングの基本を取り入れた社会福祉援助技術演習の実習課題としての意義—, 大阪体育大学短期大学部研究紀要3: 39-58
- (11) 諸富祥彦 (2010) 初めてのカウンセリング入門 (下) ほんものの傾聴を学ぶ, 誠信書房

- (12) 三島徳・久保田進也(2003) 積極的傾聴を学ぶ, 中央労働災害防止協会
- (13) 三尾忠男他(2010) 私立総合大学教員養成課程におけるマイクロティーチングの導入, 早稲田教育評論24(1):159-167
- (14) 金子智栄子(2007) マイクロティーチングに関するわが国の研究動向について, 文京学院大学人間学部研紀要9(1), 131-150
- (15) 宮田仁(2003) Webベースのティーチング・ポートフォリオを活用した授業改善支援システムの開発と試行, 日本教育工学会論文誌27(Suppl.): 61-64